

## 明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」

早瀬 晋三

(大阪市立大学)

### はじめに

清水元先生、それからわたしのあとでお話される波多野澄雄先生も、スケールの大きなお話をされると思いますが、わたしは小さなことをとりあげます。小さなことですが、わたしが話すことは、現実の人のびとにどういう影響を与えたかという具体的な話になります。タイトルは、「明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』』といたしましたが、その前に「フィリピンをめぐる」と付け加えてくださいましたら、より正確なタイトルになろうかと思えます。

まずはじめに、「南進論」について話すつもりでしたが、清水先生が先に話されましたので、割愛します。ただ菅沼貞風については、あとで少し詳しく話をさせていただきます。さきほど清水先生がお話くださった「南進論の展開」ですが、こういった議論が実践される場というのが、「大東亜共栄圏」だったと思えます。では、それがどのように実現したのか、あるいは実現できなかったのか、考えてみます。結論から申しますと、実現できなかったからこそ、アジアの民心が日本軍から離れていったのだといえます。したがって、清水先生のお話は論理的な展開としての「南進論」で、それが現実にはどう実行されようとしたのかということ、わたしは話していきたいと思っています。

いまの清水先生からのお話でもわかるとおり、「南進論」とひとことでいっても単純なものではなく、非常に複雑なものであって、それが明治期、大正期、昭和期とつぎつぎに変わっていくということです。その複雑さをもう少し簡略化してみますと、3つぐらいに分けて考えていいたろうと思います。そのひとつが「政治的、軍事的側面」であり、もうひとつが「経済進出にともなう資源開発的な側面」、そして3つめが「移民・植民の側面」ということになります。「大東亜共栄圏」というのは、ご存じのとおり軍事的な占領をいたします。ですから、3つの側面でいいますと、ひとつの側面は達成されたわけです。問題は、あとのふたつの側面が「大東亜共栄圏」のなかで、どうであったかということになります。

### 明治期「南進論」とフィリピンへの軍事的関心

明治期の「南進論」の特徴としてあげられるのは、自由貿易主義プラス海洋国家論です。その海洋国家論には、探検とか冒険とかいったロマンティズムまで感じさせるようなものがあります。現実性に乏しいという評価がされるのも、このような背景があるからだと思えます。ところが、ことフィリピンにかぎっては、これがずいぶん違ってきます。さきほど清水先生のお話で、菅沼貞風は例外だとありましたが、フィリピンにはその例外が例外たる所以がいくつかありました。第1番

目の理由は、日清戦争（1894-95年）の結果、台湾を日本が領有したことです。そして、台湾を領有しますと、当然国境問題ということが起こってきます。当時フィリピンはスペイン領でありましたから、台湾を領有したあとの日本政府は、スペインと国境線の確定作業をいたします。そういった条約を結ぶということは、フィリピンがまさに隣国になり、バシー海峡を挟んで一衣帯水の地になったということです。台湾総督府をはじめとして、台湾に調査基地をおいて南方への関心が急速に高まるという事情がありました。

そして、2番目の理由は、フィリピンで民族運動が、活発化していたという状況がありました。1896年（明治29年）にフィリピン革命が起こりますが、このフィリピン革命に日本が軍部を中心に介入をしてきます。わたしたち歴史家というのは、非常に狭い研究者です。結論を知っているんです。ですから、歴史家は未来を予測するようなことはしないのです。結論を知っているから、好きなことが議論できる。まさに時代劇の俳優が自分が斬られないことを知っているから格好よく振る舞えるのと同じで、歴史家も結論を知っているから、格好よくいろんな議論が展開できるということがあります。このフィリピン革命にかんして、日本は具体的に介入してきますが、ひょっとしたら日本がフィリピンを植民地にしていたかもしれない事実があります。それについては、あとで詳しくお話しします。

3つめは、これは少し突飛な話になるかもしれませんが、さきほど、わたしが戦後50年にあたって、「50年ではなく100年ぐらいの幅でお考えください。500年まで考える必要はございません」といいましたが、実は400年の幅でものを考えないと、この話ははじまらないのです。100年の幅で考えられた方は、もう少し時代を伸ばして400年の幅で考えていただきたいのです。それは、明治期の「南進論」にせよ、「大東亜共栄圏」のときにでできますいろいろな話にしましても、そのなかででできますのが、朱印船貿易や南洋日本町の時代に、日本がいかに南方に進出したかということです。有名なタイの山田長政の「神話」もでできます。山田長政という人物が現実存在していたかどうか、なにをしたかということもよくわからないのですが、戦前・戦中の国定修身教科書などに載りまして、大々的に教えられるというようなことがありました。400年前の「神話」が復活して、かつて南方で活躍した人たちがこの時代に登場してきます。その16世紀末から17世紀にかけて起こったことに、豊臣秀吉や徳川時代初期の呂宋征討計画というのが具体的にありました。ご存じのように、豊臣秀吉は朝鮮出兵をしますが、その後フィリピンを侵攻しようという構想がありました。そして、さきほどいった菅沼貞風にしましても、この呂宋征討について、延々と議論したあとに、「南進論」が展開されます。つまり、300年ほど前の具体的な話がありましたので、フィリピンの場合には、ロマンティズムをとまなうような悠長な「南進論」ではなく、実際に軍事占領というようなことがまことしやかに唱えられたのです。ただ、まことしやかに唱えられても、それが現実になるかどうかというのは別の問題ですが、フィリピンの場合には、いまいったようにフィリピン革命という誘因がありましたので、まんざら冗談でもなかったのです。

それに輪をかけて、知識人あるいは政治論者だけでなく、一般庶民まで巻きこんでいくようなこ

とがありました。それは、政治小説という大衆の読みものを通して、フィリピン革命が日本で広く知られるようになったことです。

#### 杉浦重剛『樊噲夢物語』

では、時代を追って少し説明を加えていきます。フィリピンをめぐる明治期の「南進論」として、いちばん古いもののひとつが、杉浦重剛の『樊噲夢物語』（沢屋）です。杉浦は、教育史をやっておられる方はよくご存じの人で、『樊噲夢物語』というわずか30ページのもので、のちに復刻されるとときには14ページぐらいしかないものを、明治19年（1886年）に出版します。杉浦重剛は教育者として有名ですが、ナショナリストの言論活動の中心となった政教社の結成にも大きくかかわった人物です。この「樊噲夢物語」のなかで書かれていることが、おおいに議論しなければならない内容だったのです。

きょう、わたしはひとつタブーを犯してお話しようとしています。というのは、移民政策、移民の議論のなかでなかなか議論できないことがあります。それは、被差別部落民あるいは「新平民」のことに絡めて移民の話をするからです。しかし、これをいわないと議論が進まないのので、あえて議論していきます。杉浦重剛という人は、わたしが現在住んでおります滋賀県大津市の元膳所藩士ですが、ご存じのとおり滋賀県というのは近江商人の発祥の地で、被差別部落の問題があり、多数の移民を送りだしたところでもあります。もっとも、さきほど申したとおり移民研究のタブーで、移民と被差別部落の関係ははっきり証明されておりませんが、杉浦の『樊噲夢物語』は、被差別部落の住民を対象にした海外雄飛策なのです。杉浦は、9万人の青年男子をフィリピンに移住させ、フィリピン人と仲良くなって、時を待って蜂起せよ、という計画案をたてたのです。これが、のちに教育論者などから非常に攻撃をくらいます。というのが、杉浦がいったことは、海外進出という体のいい被差別部落民の国外追放であったからです。戦前の移民ということばのなかには、暗いイメージがつきまといます。移民論などでは、軽く流して具体的に説明しないのですが、移民には、被差別部落民の国外追放、部落の抹殺・消滅、棄民というものがつきまっていたため、「劣等国民」というレッテルが貼られ、日本を追放された棄てられた民、棄民ということばと結びついていきます。明治中期にこういった議論が展開されまして、この杉浦の話が、フィリピンをめぐるのちのちまで展開されることとなります。

#### 菅沼貞風「新日本の図南の夢」

杉浦のつぎに「南進論」を展開したのが菅沼貞風で、明治21年（1888年）に「新日本の図南の夢」というものを書きます。明治期「南進論」者の代表的人物として菅沼があげられますが、この「新日本の図南の夢」の出版は昭和15年（1940年）です。つまり、明治21年に書かれていながら、明治期にはほとんど一般には知られていなかったのです。そのなかで、菅沼はある人の計画として、杉浦の『樊噲夢物語』をとりあげています。どうも菅沼と杉浦とは思わしくないことがあったようですが、のちに菅沼が実際にフィリピンに行くときにも、杉浦が影響したといわれています。少しこ

のへんの関係がよくわからないのですが、菅沼は「新日本の閩南の夢」のなかで、『樊噲夢物語』を延々と引用しております。もちろん引用している箇所というのは、さきほどいいました「新平民」をフィリピンに移住させ、フィリピン人と仲良くして、そして時を待って蜂起してスペイン植民政府を倒すという部分です。そのあと、杉浦は書いていないのですが、菅沼が書いているのは、蜂起して占領したあと、天皇に献上するという話です。

ただ、これだけでなく、つぎの大正期へ繋るような話も菅沼は書いています。つまり、サトウキビ・アバカ（マニラ麻）・タバコ栽培に従事する農業出稼ぎ移民を送ることを説いています。菅沼は杉浦の書いたことを実践のともわない空論だと批判しますが、それに対して菅沼は実際に明治22年4月25日にフィリピンのマニラに渡ります。マニラに渡って日本人移住者を送る、あるいは自分がフィリピンで事業を起こすという準備をします。そして、フィリピンの代表的産業のひとつであるアバカ栽培を基盤とした製麻会社を設立する準備のために、日本へ帰ろうとしたときに、無理がたたってコレラで急死してしまいます。ですから、菅沼自身の閩南の夢というものは、そこで潰えてしまうわけですが、菅沼が残っていた思想というのは、明治時代には出版されなくても、それが亡霊のように昭和10年代になって復活します。そのために、菅沼は明治の「南進論」者として非常に有名になっていきます。

こういった杉浦や菅沼の侵略主義をともなった考えは、特殊なものではなかった、ということがいえます。それは、さきほど杉浦が政教社とかかわりがあったということを書いたことが、菅沼が急逝したときに、最期を看取ったのが福本日南です。日南も杉浦との関係がいろいろあった人です。ナショナリズムとしての国民主義を唱えるのですが、さきほどの清水先生のお話とも繋がりますが、西欧追従の欧化主義に反対する意義を唱えながら、西欧の勢力の及ばない土地に侵略する、進出するといった思想をもっているわけです。つまり、非常に身勝手な自己中心的な東方盟主的な考え方のナショナリズム、国民主義であったというわけです。これも清水先生のお話にあった徳富蘇峰ですが、大正時代の例としてあがっていましたが、明治時代に彼が主催した民友社編纂で『比律賓群島』という本がでています。その前書きで蘇峰は、フィリピンで国家的膨張をする、国ができなくても民間ならできると、民間主導型の膨張主義というものを、早くも明治29年（1896年）に唱えております。こういった考えは、特別なものではなく、当時の知識人、とくに国家主義者、国民主義者といわれた人たちが、こういった侵略的な思想を唱えていたということがいえると思います。

### 末廣鉄腸『唾の旅行』

そして、こういったものが単に政治論者のなかで一般認識されただけではなく、より広い読者をもつ小説のなかに登場してきます。その小説家のひとりが末廣鉄腸です。鉄腸はおそらくフィリピンの民族運動について最初に書いた日本人のひとりだろうと思いますが、鉄腸はひょんなきっかけでフィリピンの国民的英雄ホセ・リサルと知りあうこととなります。鉄腸の代表的作品のなかに、旅行記『唾の旅行』（嵩山堂）というのがあります。これは明治22年（1889年）に出版されていま

す。この『唾の旅行』がどういふ話かといいますと、小説であてて金をガッポリ稼いだ鉄腸が、世界一周旅行をしようとして船に乗りこんだ。鉄腸は、船に乗ればひとりやふたりの日本人はいるだろうと思って乗りこんだところが、誰もいない。自分は英語がまるでできない。道中散々へまばかりします。「唾の旅行」というのは、ことばができないでもなんとかなるという話なのですが、そんなものではなくて、鉄腸は心細くなって日本人らしき人物を必死で探します。そこで日本人らしき人物をよびとめてみましたら、「わたしは日本人ではない」と日本語で答えたフィリピン人がいた。小説では「マニラ紳士」としてでてきます。この人が、一か月半日本に滞在していたフィリピンの国民的英雄、本職は眼科の医者ですが、詩人であり、芸術家であり、歴史家であり、民族学者でありと、いろいろな肩書きをもっていたリサールだったのです。語学の天才でもありまして、日本人の彼女をもったということもあって、一か月半で日本語をかなりマスターしました。語学の達人の早道は、恋人をみつけることだということを実践した人ですが、そのリサールの日本語で助けられたのが「唾の旅行」であったわけです。結局、横浜からアメリカ大陸を横断してロンドンまで、リサールと鉄腸は弥次喜多道中というか、ひとり滑稽なのがいて、もうひとはみえて非常に困って、でも人はいいので、ずっと助けていたというのが『唾の旅行』です。

その道中に鉄腸はリサールからいろいろ話を聞いて、それをまとめたのが『南洋の大波瀾』（春陽堂、明治24年）という政治小説です。『南洋の大波瀾』のストーリーを簡単に説明しますと、日本人の先祖をもつマニラの多加山という人（高山右近の高山とは違うが、日本人は高山を連想する）、フィリピン人の多加山がスペインと戦って日本の援助のもとに勝利をして、植民地から解放される、そしてフィリピン諸島を天皇に献上するという話です。つまり、末廣鉄腸もこういった侵略主義的な考え方、さきほどいった杉浦、菅沼と同じ発想をもっていたということがわかります。

ほかにも、山田美妙という言文一致運動で知られる文学者がいますが、美妙もかなり政治活動を行なった人です。この美妙が明治32年（1899年）ぐらいからフィリピンを題材としていろいろ書きます。『暗黒世界まにらの夢』（三国書房）、政治小説『あぎなるど』（内外出版協会、明治35年）—アギナルドというのは、フィリピン革命期の初代大統領になった人物の名前です—、『小説・羽ぬけ鳥』、『さびがたな』（ともに日出国（ヤマト）、明治36年）などができます。こういった大人の世界だけではなく、押川春浪という冒険小説を書く人がいますが、少年向けの小説を書きます。『武俠の日本』（博文館、明治35年）とか一連の「軍艦五大小説」など、フィリピンを題材とした小説を少年向けにも書いているということで、ひと昔前、もちろんいまはもうご存命の方はほとんどいらっしゃらないと思いますが、誰でもが知っている話としてフィリピン革命ができたのです。

### 日本のフィリピン革命への介入

そして、そのフィリピン革命は小説の世界だけでなく、具体的に日本の軍部・政府と絡んできます。フィリピン革命軍は、これはフィリピン史のなかで議論になることなのですが、民族運動をするにあたって外国の援助に頼ろうとします。日本に頼るかアメリカに頼るか、フィリピン革命軍の

なかではたいへんな議論になります。そして、ある時期までは、日本に頼ろうという派が主流になっていましたが、ある一晚をきっかけにフィリピン革命軍内部では、日本に援助を求める派からアメリカ派に変わります。その結果、デューイ提督と結んでアメリカの援助のもとにフィリピン革命を継続し、そしてアメリカに騙されて、アメリカの植民地になってしまった、というのがアメリカのフィリピン領有にいたる経過です。

しかし、もし、そのある一晚がなければ、日本のほうが介入して、フィリピンを植民地にしてもいいかもしれません。具体的にフィリピン革命軍は、当時日本に武器援助のための使節を何人も送っておりました。そして、その仲介役として中国の辛亥革命で有名な孫文がいました。日本では宮崎滔天、犬養毅、平山周、代議士の中村弥六、こういった人たちが加わりまして、フィリピンに武器援助をしようということになります。で、詳しいことは省きますが、武器は送りました。明治32年(1899年)7月19日「布引丸」という老朽船に、使い古しの陸軍からの払い下げ村田銃など、武器弾薬を積んで長崎港を出帆します。この船が着いていれば、歴史は変わったかもしれません。着かなかったのです。予算の関係で、老朽船しか手に入らず、あまりぐずぐずできませんでしたから、無理をして出帆したのも一因でした。日本政府は知っていたのですが、知らないことにしていました。つまり、日本政府とすれば、こういった問題に下手に絡みたくない、一部の軍人あるいはアジア主義者が勝手にやったことにしておきたかったのです。結局、嵐の前ぶれを感じさせるなかを出帆した「布引丸」は、2日後、上海沖で沈没してしまいました。武器と同時に、日本の志士といわれた人たちもフィリピンに行くことになっていました。そのなかには平山周もいました。将校クラスの人も入っていましたが、武器が着かなかったことや、実際に革命軍に参加しようとして、ことばの問題があったということなどがあって、具体的には活躍しませんでした。

しかし、武器は着かない、志士は活躍できないとしても、日本の軍部はその後ずっと工作員いわゆるスパイを送りつづけます。台湾を中心に、あるいは陸軍から、そして大正期には陸軍の年度計画でフィリピンへ将校を工作員として送ることが制度化します。現在の駐在武官みたいなものですが、ただ領事館にいないで、変装変名でフィリピン各地を歩くということが戦争直前まで行なわれていました。こういった軍事工作は、明治期以来ずっと行なわれたことですので、その継続性については重視しなければならないと思います。しかし、そういう継続性があり、フィリピンでも親日派グループが日本の武器援助をたのんで蜂起するというサクダル党の反乱が昭和10年(1935年)に起こったりしましたが、大正時代、昭和の初期にかけて、フィリピンをめぐる「南進論」というのは、具体的なものではありませんでした。「南進論」一般については、清水先生が話されたとおり、いろいろな議論がされていましたが、フィリピンにかんしての具体的な議論ではありませんでした。

#### 明治期「南進論」の復活

ところが、昭和10年代になってきますと、新たな「南進」の議論はおこらないで、明治期の「南

進論」が復活してきます。その代表が菅沼貞風で、それを年代順に追っていきますと、昭和10年に在マニラ日本人会によって日本人墓地で盛大な遷墓式が行なわれます。マニラで死んだ菅沼の墓は、マニラにもありました。そのマニラの墓を立派にしたということです。その後、佐世保のほうでも佐世保商工会議所会頭の北村徳太郎を発起人として菅沼貞風遺著刊行会というのが組織され、15年に「新日本の凶南の夢」「平戸貿易史」を付録として、彼の代表作である『大日本商業史』が岩波書店から刊行されます。そして、16年には再版が出版され、『菅沼貞風略伝』（東半球協会）あるいは小説『菅沼貞風』（赤沼三郎著、博文館）が出版されます。17年になりますと、平戸でマニラ陥落報告墓前祭が営まれ、『南進論の先駆者菅沼貞風』（花園兼定著、日本放送出版協会）や『南進論の先駆者 菅沼貞風伝』（江口禮四郎著、八曇書林）が出版され、7月6日には大隈信常を会長として、菅沼貞風顕彰会が設立されます。このように、昭和17年という戦争中になって、菅沼は「南進」の先駆者としての地位を確立していきます。杉浦重剛の本が復刻されるのも、やはりこの時期です。『樊噲夢物語』は、昭和18年に復刻（東半球協会）されております。

このようなことは何を意味するのか、つまり明治期の「南進論」がでてくるといことは、それにかわる新たな「南進論」はなかったとも読めます。そして、その明治期の現実性に乏しい「南進論」が戦争がせまって、また戦争に突入してもでてくるといことは、日本の「大東亜共栄圏」思想を生んだ日本軍あるいは日本政府に展望がなかったということの意味しているのではないかと、つまり、占領はした、しかしその後の軍政にかんする具体的な青写真はなかったというふうにも考えられます。

### フィリピンの在留邦人

それを具体的に、フィリピンの在留邦人を例にみていきます。菅沼や杉浦がいったとおり、移民を送ってフィリピン人と仲良くして蜂起するということができただろうかです。まず、在留邦人が、フィリピンにはどのくらいいたかといいますと、戦前に約3万人がいました。とくに、南のミンダナオ島のダバオには、約2万人の在留邦人がいました。しかも、菅沼が計画していた製麻会社の原料となるアバカ（マニラ麻）を栽培しておりました。つまり、菅沼が望んでいた農業移民だったのです。その約2万人、成人男子だけでも1万人近くおりましたが、そういった人びとが利用されないうわげがないと考えるのが普通です。ところが、日本の軍部のほうでは、このような在留邦人たちを計画的に利用していません。皇民教育の行き届いた在留邦人は、日本人としてお国のために一所懸命戦争協力しようとしみます。ところが、軍部のほうでは組織だって利用しないんです。彼らは、勤労奉仕とか献金とかありとあらゆることで、一所懸命協力をしますが、軍政監部が在留邦人に求めたことは「比島民衆の亀鑑」、つまりフィリピン人のお手本になれとしかいわないんです。それだけならまだしも、お手本になっていない不良邦人が多いということをさかんにいいまして、この不良邦人つまり在留邦人を検挙したとか、国外追放したとかが新聞を賑わします。つまり、在留邦人の献身的な軍政に対する協力は、実はこれも褒められたことではないんですが、つまり、在留邦人

が軍部に協力すればするほど、フィリピン人を圧迫する、具体的にいうとフィリピン人を殺すということにかかわってきます。戦後、戦犯に問われた人たちのなかに、在留邦人が名を連ねるのは、軍の先頭に立って通訳をしたり、手引きをしたりということで、一所懸命協力した結果、フィリピン人にはまさに被害の張本人にみえたからです。ということで、あまり褒められたことではないのですが、その時代に生きた在留邦人にとっては必死でした。つまり、立派な日本人になるために、必死で協力したのです。ところが、それがぜんぜん日本軍に評価されなかったのです。

たとえば、戦後の昭和21年、復員局に「比島軍政ノ概要」を報告した元軍政監部総務部総務課長犬塚恵亮陸軍少佐が、こういうふうにならざることを評価しています。「外務省大商社ノ関係者ヲ除キテハ戦前在比日本人ハ概ネ漁業、麻栽培、大工等ヲ主業トシ大部分沖縄県出身者ナリ一般ニ教養低ク、礼節ニ乏シク特ニ下流比島婦人トノ結婚ニ依リ出生セシ日本籍第二世ニ於テ甚タシ」。こういうふうな評価しかしてもらっていないのです。それどころか、「戦前ヨリノ居住者及開戦後渡比者中不当ナル手段ニ依リ私利ヲ図ラントスル者無キニアラス」、そして、最後には、「本時期日本人ノ体面ヲ汚シタル者数名ニ対シ内地送還セリ」と書かれています。

明治期の「南進論」では、積極的に日本人を送って土地の人と仲良くしなさい、とっていました。ところが、どうも土地の人とも仲良くしていなかったようです。開戦時に、在留邦人はフィリピン兵やアメリカ兵によって捕虜として収容されます。収容中に起こったことというのは、フィリピン人による日本人の家屋の略奪、あるいは焼き打ちです。つまり、フィリピン人と仲良くして、そのフィリピン人が在留邦人の財産を守ってくれるということはなかったのです。日本人学校を建てたりして、現地人とあまり交わらなかったということもあり、フィリピン人と仲良くしてアメリカに蜂起するということは、現実には起こらなかったわけです。

### 人をランクづけした日本軍

こういったことがなぜ起こったのかということを考えてみますと、杉浦重剛にみられるような被差別部落民、つまり「新平民」を海外に棄民するというような、移民に対して「劣等国民」のレッテルを貼るような発想があったこと、琉球処分の関係で沖縄県人は立派な日本人ではないというようなことがいわれたことが影響していたと考えられます。ダバオの場合には、約半分が沖縄県出身者でしたが、それがものの本には、8割、9割が沖縄県人である、と誇張されています。つまり、フィリピンの在留邦人は、本土からやってきた日本人ではない、ということがさかんに強調され、在留邦人は本土からやってきたこと、被差別部落民ではないことを証明するために、一所懸命日本軍に協力し、その結果、フィリピン人と一線を画する言動をとることになったのです。

このことは、日本軍がなぜほかのアジアで人望を得なかったか、ということと関連をします。というのが、日本軍の大義名分は、白人優位の神話の支配からアジアを解放するということでした。そして、精神力、自己犠牲の優位に基づく「大東亜共栄圏」を建設するということでした。この大義名分は、開戦初期のころ賛同を得る面もありました。ところが、実際に軍政がはじまると、日本



人は白人以上に差別する人たちだ、つまりフィリピンではフィリピン人だけでなく、よくみると日本人のなかでも上下関係をつけている、と気づくようになります。戦前からダバオにいた沖縄県人は、「オートロ・ハボン（別の日本人）」とフィリピン人からよばれていました。フィリピン人も、沖縄県人が本土からきた日本人から違う目でみられていたのを知っていたのです。そういった日本人によるランクづけが、戦時中に顕著にみられました。戦時中のフィリピンでは、まず、日本軍人が優位に立ち、その下に軍政に参加した日本人文官である司政官、内地から派遣された大会社の社員、それから戦前から居住する在留邦人それも内地出身者、沖縄出身者、そしてフィリピン人と結婚した者、フィリピン人と結婚した者とのあいだに生れた混血児、というランクがあり、フィリピン人もキリスト教徒フィリピン人、白人系の混血フィリピン人、中国系、マレー系、そして華僑、イスラーム教徒、少数民族といったようなランクの細分化がされていきました。

最近発行された南條岳彦著『1945年マニラ新聞』（草思社、1995年）という本を読んでいてびっくりしたのですが、同じ毎日新聞社からマニラに派遣された記者であっても、3種類にランクづけされていたのです。その3種類とは、軍の報道班員として派遣された者、つぎに日本に本社のある毎日新聞社のマニラ支局員として派遣された者、それから当時マニラにはマニラ新聞社という毎日新聞社が経営していた新聞社がありましたが、そこに派遣された毎日新聞社の記者の3つです。もともと皆同じ毎日新聞社記者です。ところが、この3つがフィリピンでは歴然としたランクをもって処遇されていました。

つまり、明治期以来の「南進論」のなかには、侵略的なものと同時に人種差別的なものが多分に含まれていました。さきほどアジア主義者ということで清水先生がお話になりましたが、ヨーロッパ対アジア、そしてアジアのなかでも、こういった人種差別的なものを盛りこんだ「南進論」がずっと唱えられることによって、在留邦人を有効に使うどころか、フィリピン人の協力も得られない。そして、フィリピン人のなかでもっとも協力を得やすかったはずの親日派の人たち、この人たちはカリバピ（新比島奉仕団）あるいはマカピリ（愛国同志会）という組織に編入された人たちですが、これらの人たちを有効に利用することができなかった。つまり、現地のフィリピン人にいちばん近い在留邦人を利用せず、日本・日本人にいちばん近い親日派フィリピン人も、その特性をいかして利用することもせず、そして協力だけさせて、終戦時には在留邦人は山の中に見捨てられ、親日派フィリピン人も廃滅していくという悲惨な結果になったわけです。

### おわりに

ここで、話をまとめます。最初に、「南進論」というのは3つの側面があり、そのひとつの政治的・軍事的なものは、軍事占領したのですから成功した、といました。つぎに、経済的なもの、資源開発といった実利的な側面ですが、これはフィリピン貿易において、1929年（昭和4年）には日本の貿易高はアメリカについて第2位を占めるまでになっていました。ところが、フィリピンはアメリカの植民地ですから、その特殊な関係によって貿易の大部分はアメリカが占め、日本がフィ

リピンとの貿易のなかで占める割合は、たかだか1割でした。この1割しかない経済力が、戦時下の経済破綻と結びついていきます。つまり、フィリピン経済はアメリカに頼らなければ成り立たないという経済構造になっていました。それにかわる経済的なものを、つまり1割しかもともっていない日本が、残り9割を補うことが戦時経済でできなかったことで、フィリピン経済は破綻をしていきます。その破綻と同時に、人びとは物資不足に苦しむようになりますから、軍政に対しての非難がでてきました。そして、3番目の移植民活動にともなう人心の把握、これはいま申しましたように、在留邦人やフィリピン人の人心把握ということがまったくできなかった。つまり、明治期の「南進論」のなかにてできた軍事的な侵略以外のことは、まったく「大東亜共栄圏」のなかでは実現をみなかったということが結論としていえます。このことから、「大東亜共栄圏」の虚構性ということを語るのではないかというのが、わたしの本日の結論です。